



環境広場



かんきょうひろば



「お針子事業」で環境人づくり企業大賞受賞

日本リユースシステム

「古着deワクチン」でSDGsアワードも

環境人づくり企業大賞は地球環境に配慮した企業経営の必要性を認識し、その実現のため自ら進んで行動する人材を育成する企業を表彰するもの。6回目となった今回は合計81件の応募があり、その中から環境大臣賞中小企業区分の最優秀賞に同社が選ばれた。

同社が行っている「お針子事業」は、ハンドメイドを趣味とする社員の発案がきっかけとなり、2017年に開始された。一般家庭などで眠っている着物を集めて、モンゴルの現地法人に輸出し民族衣装「デル」の素材として再利用するという取り組みも、「伝統(着物や帯)×伝統(民族衣装)＝進化(進化系民族衣装)」をテーマに掲げ、これまで41万点以上の着物や帯を再利用してきた。

日本やモンゴルの学生に着物等が廃棄される現状を知ってもらい、環境意識を高めてもらうよう、両国の学校でセミナーも開催。着物等が廃棄される問題解決のコンセプトに賛同した日本の服飾学校の生徒らが「お針子デル」を任立ってモンゴルの催しで披露するなど、廃棄減少につながる取り組みを進めている。社員教育としては、全社員を対象に希望するセミナーを無料で受講できるようにしているほか、

日本リユースシステム(東京都港区、山田正人社長)はこのほど、環境省などが主催する「環境人づくり企業大賞2019」で最優秀賞に当たる環境大臣賞を受賞した。同社が社員を対象に行っている環境(SDGs)教育は、それをもとに始まった「お針子事業」が、日本で不要となった着物や帯の廃棄減少や温室効果ガスの削減につながり、SDGsの達成に貢献している点が評価された。昨年末には第3回目となった「ジャパンSDGsアワード」で、「古着deワクチン」の取り組みが評価され特別賞(SDGsパートナーシップ賞)も受賞。同社は「捨てさせない屋」をモットーに、日本の「ごみ」を世界の「宝」に変えるさまざまな取り組みを進めている。



お針子事業ではモンゴルで着物や帯を再利用

同社お針子事業部の望月美香さんは、「着物や帯は日本の誇るべき伝統文化だが、それが不要なものとして多く捨てられていく現状を残念に思い、少しでも変えられたらと始まったのがお針子事業。海を越えモンゴルで新たな価値を生み出し、お針子デルとして形を変え活かされている様を見るのは大きな喜び」と話す。

一方、SDGsアワード(主催SDGs推進本部、本部長 安部晋三首相)では、「古着deワクチン」の取り組みが評価され特別賞を受賞している。これは、不要となった衣類を回収して開発途上国で再利用する取り組みにリユースを寄付する取組と同時に、途上国の子どもたちの命を守る取り組みもつながっている。2010年の開始から今年で10年目を迎え、4月までに累計で約188万5千4650着分の衣類を再利用し、238万87700人分のワクチンを寄付している。

古着deワクチン事業を担当する古澤マツキリ・ライフサイビス部部長の今野優子さんは「10年間続けて来られたのは利用いただいた累計何十万というユザーの皆様や、共同事業として携わってくださる企業様・団体様などの支援のおかげ。今後も皆様の「思い」を大切に、より多くの衣類をリユースしていただけるよう、SDGs達成に向けて励んでいきたい」と話している。



古着deワクチンの取り組みは10年目を迎えた

コロナ問題で資料の涉猟もままなりませんので、歴史話を休み、最新の街路樹問題をお伝えします。

私たちが木の手を始めたら2018年頃は五輪開会の道路整備や地下埋設物工事のため、健康な街路樹が伐られました。幸い、多くの方のおかげで減りつつあります。

ところがその後、急に増えた伐採理由があります。街路樹診断によって「不健全」とされた木を、倒木を防ぐための伐採するのです。樹木をモノ扱いし、対話と思考を欠いた措置です。

4月に発覚した事例を挙げます。東京都建設局第一建設事務所(一建)が所管する代田区、中央区、港区の都道の街路樹、計1万本弱のうち、昨年1800本を街路樹診断し、「不健全」とされた175本を直ちに伐採し始めたのです。

街路樹診断とは、樹木医の資格者が、樹木の外観や打音や空洞などから街路樹の健全性を診断して